

短歌往来

作品：奥村良作＋青木彌子＋橋田立身＋神山千恵子＋安藤直孝＋岡田衣代＋山中律雄＋川田田希子＋田村元十＋鈴木英子＋岩尾淳子＋染野太朗＋くぼたかずこ＋清水正人＋山本雪子＋松谷兼一郎＋岡本育与＋大井学＋森水島

「特集」

花ふぶく春のうた



月刊短歌雑誌

4

APRIL 2014

巻頭作品 — 高野公彦 特別作品 — 川野里子＋本田一弘
評論 — 田中教子 特別企画 連詩歌の試み(2) — 大岡亜紀×畑彩子
追悼 — 田谷鋭 長澤一作 藤井常世

連詩歌の試み(2)

紫陽花の巻

大岡亜紀×畑彩子

- 一 雨もよいの空の下 川べりの紫陽花が咲き初める 亜紀
風は木立ちを渡ってゆく ソウのはな子に報せるために 彩子
- 二 この池に名前はなくて春夏秋冬に陶器のような水鳥うかぶ 彩子
- 三 胸のなか まなざしも声も汗さえも 亜紀
あなただけを指す しるしとして在る 彩子
- 四 ひとひらの雲を溶かしたような酒 甘すぎもせず辛すぎもせず 彩子
朝夕の仏前は 野良着の母の対話のひとつとき 亜紀
- 五 アロハシャツ着た若者が犬を打ち罵倒している だれも見ぬふり 彩子
殺人がおきた通りをバスは行く 春の満月だったあの夜 亜紀

- 七 めくるページのごと 時をかさねても
日なたの匂い おなじ味 だれかの靴音はタイムマシン
昨日ころんだ子 去年のギター 七年前のわたしの涙
重紀
- 八 パンケーキひとつをわけあう老夫婦夜明けの雨が濡らしたベンチで
彩子
- 九 抽斗から見つけたのは 古びた斑まだらのモノクロ写真
視覚ニューロンがはるかな旅を蘇らせる
重紀
- 十 白百合の花粉とびかう午後なればポアンカレ予想の本も読みたり
彩子
- 十一 エッフェル塔の見物料でも足されているかと訝しみつつ
やけに高いエスプレッソする トロカデロ広場ひとり
重紀
- 十二 水しぶきあげて少女はとびこんだピルの谷間のあおい噴水
彩子
- 十三 不安と自信に醸されて 唇に紅はころんでゆく
重紀
- 十四 ここならば神に近い、と彼は言いさびれた港町に棲みおり
真二つに割られ中身を晒されて震える牡蠣ら この十二月
彩子
- 十五 葉擦れのこだまだけが響くトンネルで
わたし以外の息遣いが たしかに耳をかすめた
お稲荷さまの裏手 異界を孕んだ千本鳥居
重紀
- 十六 令嬢は咳き込みつつも花魁を描き続けた炎のような
彩子
- 十七 向かいの小母さん養生しすぎで太り肉
八十路の笑顔にシワもなし
重紀
- 十八 ふと目覚め鳥鳴く声を陸橋でジキルは聞いた しらみゆく空
彩子
- 十九 菩提樹の木蔭で横になれば
護られているような温ぬるいだけのよう な 南の島
重紀
- 二十 海沿いのこの墓地もやがて水没しイトマキエイの住み処とならん
彩子
- 二十一 龍宮の賃貸料は如何ばかり 仲介業者はどちらでしょうか
重紀
- 二十二 ブルックリンめざし太郎は歩いたよゲイの作家と子猫を連れて
ジャズ・バーで君が泣いてたあの夜もアスピリン舌でころがしていた
彩子

二十三 ひさかたの都の灯り いまは彼方
ぬばたまの間にまぎらせ恋ひとつ
投げて沈めた ゆめの浮橋 重紀

二十四 この秋の葡萄の凶作言いつのる髭の男に幼な妻あり 彩子

二十五 薄物を ためらいつつも剥ぎとれば
誇らしく香る水蜜のやわ肌 重紀

二十六 あ、揺れる やさしい言葉もあなたの顔も 金魚は泡ひとつを吐きぬ 彩子

二十七 遠のくものために解けた扉なら
いっそ開け放せ 訪うもののために 重紀

二十八 あかつきに風は去りて蜘蛛たちはきらめきながら西風に乗る 彩子

二十九 経の糸に緯の糸 さて今日をどう織りあげようか 重紀

三十 祖母はもうお地藏さんのかおになり日がな真白き部屋に座りて 彩子

手づかみでマカロニはおぼる父と子をほんのり照らす祖父のランプは

三十一 ありったけのこの世の営みを
体に纏ってなにげなく

黒猫は小走りに横切つてゆく 重紀

三十二 夏は宵。月なき夜も金星は千年前より強くかがやく 彩子

*短歌はまず二つの単作のあとに二連作、そして三つの単作のあとに二連作をいれるくりかえし。

*詩は二、二、一、三行詩のくりかえし。

* 補注 *

一 一九四七年にタイで生まれ、上野動物園を経たのちの六十年近くを武蔵野の井の頭文化園で過ごし、いる象のはな子。その棲家からほど近い、玉川上水のほとりに今年も紫陽花が咲きはじめれば、風はその報せを届けにくだらう。おそらく彼女が見たことのない、三〇〇メートル先のその風景を。

二 名もない小さな池でも、どういいうわけか惹かれてしまう時がある。もしかして前世の私は、その池に浮

五 かぶ水鳥だったかもしれない。
一家を担う農家の女あるじ。畑仕事の前後に仏壇と対坐して、誰にも邪魔をさせない、連れ合いとのひととき。

六 二〇一三年三月、吉祥寺の瀟洒な通りで起きた殺人事件。我が家からも遠くない場所、一時は騒然とした雰囲気にも包まれていたが、まもなく街は元通りの賑わいを取り戻した。

ヒトの視野は、欠損が生じた場合でも、欠けた部分
が知覚するはずの景色を脳が補って、あたかもそこ
が見えているかのように錯覚することがあるという。
古びて色褪せた写真にも、脳は何らかの作用をおよ
ぼすのか。そこに写るのが親しい者であればあるほ
ど、彼らの輪郭も風景も鮮やかに色付けされる。

世紀の難問・ポアンカレ予想を解いたロシアの天才
数学者は、名誉や地位を自ら拒絶して、世捨て人同
様の生活をしているという。あまりにも難解なポア
ンカレ予想より、その数学者の生き方が私にとって
の「おおいなる謎」である。

まぶしいような頼りないような、けれど意志つよく
感ぜられる少女の成長。瑞々しい蕾がゆっくり開い
ていけば、頬も唇もゆたかな紅色を帯びはじめる。

私の持つ「さびれた港町」のイメージ。そんな場所
でなければ見えないもの、逢えないものもあるのだ
はないか。一首目は水田和宏の短歌（林檎の花に胸
より上は埋まりおり、そこならば神が見えるか、ど
うか）の本歌取りでもある。

娘盛りをサナトリウムで過ごしたご近所さんは、養
生に養生を重ねてふくよかこの上なし。とまれ、め
でたきかな。

みた。知らないうちに自分が変わってゆくことをお
それる気持ちも込めた一首。

二十二 現代版「桃太郎」のイメージ。アメリカ東海岸に漂
着した太郎は、新しい仲間と共に、様々な民族の集
うブルックリンへ乗り込んだ。

二十五 触れただけで傷んでしまいそうな、水蜜桃の果肉と、
やわらかく薄いヴェールのような皮。そして若い妻
は匂いやかに誇らしく、夫を見つめる。

二十八 蜘蛛のバルーンを詠んだ一首。すでに終盤であ
ることを考え、最後は明るい方へ飛翔したい、とい
う願いを込めて。

二十九 めぐり来る日々の様子を、ゆるがせにせず織りあげ
ていったなら、その晩には、どれほど艶やかで堅牢
な織物が仕上がるだろう。

三十一 過去から未来へ連続とつづいていく、わたしたちの
営み。縁は、互いに引き合い緩み合い、すべてのも
のを絡ませて、また、ひとりびとりに還っていく。
黒猫には、とくにわかっていること。

三十二 「枕草子」の一節にインスパイアされた一首。金星
の美しさは清少納言も認めており、その力強い輝き
は、彼女の文芸が持ったぐいまれな輝きにも似てい
る。

★二〇一三年五月二十九日〜七月六日 創作

【特別企画】 連詩歌の試み(2) 大岡亜紀×畑彩子 93

●作品七首

- 北山／米田律子——29
分婉・他／杜澤光一郎——30
一枝／松水智子——31
診療余滴／山村泰彦——32
一筆啓上／山形裕子——33
一年忌／塩野崎宏——34
雪の日に／沢口美美——35
境界彩う／鈴木千代乃——36
求人倍率／島崎栄一——37
譬へのみかは／水落博——38
積雪／川本千栄——39

●作品八首

- 師を悼む／町田勝男——80
除雪車／中村雅子——81
あるメモリアル／古屋清——82

■連載——浪々残夢録②

茂吉の「かりようびんが」の歌／持田潤二郎——102

■連載——記紀に遊ぶ②

亀卜神事とサンソーロー祭り／小黑世茂——104

■連載——編集者の短歌史④

寺山修司の苦言／及川隆彦——106

■連載——短歌の近代④

三島由紀夫は和歌文化を
護ろうとした／島内景二——108

■連載——樺太を訪れた歌人たち②

出口王仁三郎と山火事①／松村正直——112

■連載——詩言・花漢山日誌より②

超絶 凄ワザ！／福島泰樹——116

■今月の視点

路上のうた／中井龍彦——1

■今月の新人——作品5首

極光／八木ちひろ——9